高峰譲吉略年譜

年	事項	年齢	その年の出来事
嘉永7年　1854	（出生日については諸説あり）　越中国（加賀藩領）高岡にて、蘭方医の父・精一と母・幸子の長男として生まれる。翌年、加賀国金沢に転居。	0	ペリー来訪
慶応元年　1865	加賀藩の命を受け長崎へ留学。ポルトガル領事ロレーロ宅に寄宿。	11	米・南北戦争終結
明治2年　1869	京都、大阪などで学んだ後、加賀に戻る。七尾語学所でオズボーン（英）から英語を学ぶ。再び大阪に戻り、大阪舎密（せいみ）学校でリッテル（独）に化学を学ぶ。	15	大村益次郎暗殺 スエズ運河開通
明治5年　1872	舎密局閉鎖に伴い上京、工部省の官費修技生（のち工部大学校）となる。	18	『学問のすゝめ』刊行
明治12年　1879	工部大学校応用化学科を首席で卒業。翌年からイギリス留学。	25	コレラ大流行
明治16年　1883	2月　英国留学から帰国し、農商務省工務局に入庁。	29	富山県が分離独立
明治18年　1885	ニューオーリンズ万博に長期派遣（前年12月から）。人造肥料の生産や特許制度などを学ぶ。　下宿先であるヒッチ家の娘・キャロラインと婚約。 9月　帰国し、農商務省特許所（局長は高橋是清）と兼務、所長代理となる。	31	日本郵船設立 内閣制度開始
明治19年　1886	12月　神戸で渋沢栄一と知り合い、人造肥料製造の会社設立に動き出す。	32	米・自由の女神建立
明治20年　1887	渡米し、キャロラインと結婚。　帰国し、東京人造肥料会社（現・日産化学工業）を設立。社長は渋沢栄一、譲吉は技術長兼製造部長となる。	33	学位令公布
明治21年　1888	会社経営に専念、官職を辞す。8月　長男譲吉Ⅱ（Jokichi. Jr.）誕生。	34	枢密院設置
明治22年　1889	9月　次男エーベン孝（Ebenezer Takashi）誕生。	35	大日本帝国憲法発布
明治23年　1890	東京人造肥料を退職、渡米するも肝臓病のため4カ月の療養生活を送る。	36	森鴎外『舞姫』刊行
明治24年　1891	シカゴで元麹改良法による実験に成功、特許出願。翌年醸造場設立開始。	37	足尾鉱毒事件
明治26年　1893	火災（放火？）によりイリノイ州ピオリアの醸造場を失う。さらに肝臓病を再発。	39	シカゴで万博開催
明治27年　1894	麹菌から消化分解酵素であるアミラーゼの抽出に成功、消化酵素剤「タカヂアスターゼ」として特許を出願。	40	日清戦争始まる
明治30年　1897	タカヂアスターゼの実用化についてパーク・デイビス社（現・ファイザー社）と交渉。一家でニューヨークへ移住、マンハッタンに住居とラボを構える。	43	米・ハワイ併合
明治31年　1898	西村正太郎、シカゴでタカヂアスターゼの試供品を服用したことをきっかけに、日本での輸入販売について譲吉の承諾を得る。翌年塩原又策・福井源次郎とともに三共商店（現・第一三共株式会社）設立。	44	キュリー夫妻がラジウム発見
明治33年　1900	助手の上中啓三とともに、副腎からの生理活性物質「アドレナリン」の精製、結晶化に成功。特許出願。	45	パリに地下鉄が開通
明治34年　1901	米国各地でアドレナリンについての報告発表。	47	八幡製鉄所操業開始
明治37年　1904	『ニューヨークプレス』に「日本における諸科学部門の驚異的発達について」を発表。セントルイス万博の日本館「松風殿」を解体移転し別宅として保存、日米親善の社交場や政財界の要人の迎賓館として利用された。	50	日露戦争開戦
明治42年　1909	桜の苗木2000本以上を日本から輸入するが、植物検疫によって全て没収。	55	伊藤博文暗殺
明治45年　1912	再度桜の苗木を取り寄せ。ニューヨーク・ハドソン河畔に2100本植樹。日米親善の象徴として、今もニューヨークの春の風物詩となっている。	58	明治から大正へ
大正2年　1913	三共株式会社の社長に就任のため一時帰国。国内各地で講演活動を行う。	59	第一次護憲運動
大正3年　1914	三共株式会社品川工場でタカヂアスターゼ国産化開始。	60	第一次世界大戦勃発
大正6年　1917	3月　譲吉がその必要性を強く主張した国立基礎科学研究機関「理化学研究所」が東京・文京区駒込に設立される。設立者総代は渋沢栄一。伏見宮貞愛親王が初代総裁となる。	63	ロシア革命
大正7年　1918	5月　富山県内の新聞3紙に論文「富山縣下に於ける輕銀興業」を発表。	64	スペイン風邪流行
大正9年　1920	黒部川水力発電所建設の認可を取得。塩酸アドレナリンの国産化に成功。	66	日本初国勢調査実施
大正11年　1922	6月　カトリック入信。7月22日　ニューヨークにて死去。	67	大隈重信死去
大正13年　1924	孫・Jokichi　Ⅲ誕生。		
大正14年　1925	妻キャロライン、牧場経営者のチャーリー・ビーチと再婚。		
昭和2年　1927	J.J.エイベルが『サイエンス』誌に「譲吉のアドレナリン発見は自身の研究の盗用である」との回想録を発表。この主張が受け入れられ、アドレナリンはその後長らく医学分野ではエイベルの命名した「エピネフリン」と呼ばれる。		
昭和31年　1966	助手・上中啓三のアドレナリン抽出実験ノートが発見され、全文公開される。これにより、アドレナリンは盗用ではなかったことが証明される。		
平成18年　2006	菅野富夫・北海道大学名誉教授らの働きかけもあって、日本薬局方第15版改訂により、ようやく「エピネフリン」ではなく「アドレナリン」の呼称が医学的にも用いられるようになる。		

参考：飯野和正・菅野富夫『高峰譲吉の生涯』（朝日新聞社）、アグネス・デ・ミル『高峰譲吉伝』（雄松堂出版）

年齢は満年齢、誕生日経過後の日付として計算する。